

#### (4) 二次判定の変動

予防有用型に分類された集団における初回の要介護認定結果を分析した結果、要支援が2,165名(32.8%)、要介護1が2,784名(42.2%)、要介護2が1,016名(15.4%)、要介護3が418名(6.3%)、要介護4が150名(2.3%)、要介護5が53名(0.8%)であった。

2回目は、要支援が1,990名(30.2%)、要介護1が3,071名(46.6%)、要介護2が1,124名(17.0%)、要介護3が319名(4.8%)、要介護4が84名(1.3%)、要介護5が7名(0.1%)であった。

3回目は、要支援が1,855名(28.1%)、要介護1が3,094名(46.6%)、要介護2が1,195名(18.1%)、要介護3が378名(5.7%)、要介護4が67名(1.0%)、要介護5が5名(0.1%)であった。

4回目は要支援が1508名(22.9%)、要介護1が3,331名(50.5%)、要介護2が1,515名(23.0%)、要介護3が224名(3.6%)、要介護4が11名(0.1%)であった。

このように予防有用型の初回の二次判定は、一次判定と同様に要支援、要介護1が多かったが、要介護3が6.3%、要介護4が2.3%、要介護5が0.8%の合計9.6%と概ね1割が含まれていた。2回目にも、同様に要介護3が4.8%、要介護4が1.3%、要介護5が0.1%含まれ、合計6.2%あったが、その割合は初回よりも低下していた。3回目は、要介護3が308名(5.7%)、要介護4が84名(1.0%)、要介護5が30名(0.1%)で、これらの割合は、6.8%であった。4回目には、要介護3が224名(3.6%)、要介護4が11名(0.1%)と示され、要介護5は消失し、合計でも3.7%と低下しており、この結果は一次判定と概ね一致していた。

したがって、初回認定の際に予防有用型と判定された高齢者群は、この他の要介護高齢者に比較すると要介護度が大きくの悪化する者は含まれていないことがわかった。

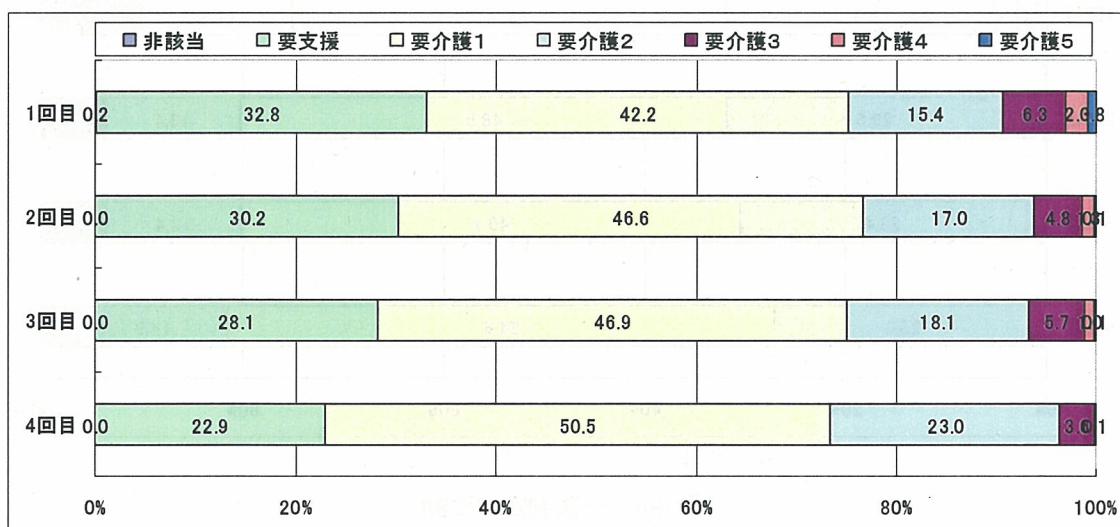


図 197 二次判定の変動

#### 4. 認定時点の予防有用型における『認知症高齢者の日常生活自立度』の変動

予防有用型の『認知症高齢者の日常生活自立度』をみてみると、初回では「正常」が4,005名(60.7%)、「I」が1,619名(24.5%)、「II a」が394名(6.0%)、「II b」が453名(6.9%)、「III a」が91名(1.4%)、「III b」が20名(0.3%)、「IV」が12名(0.2%)、「M」が3名(0.0%)であった。

2回目では、「正常」が3,816名(57.8%)、「I」が1,766名(26.8%)、「II a」が441名(6.7%)、「II b」が480名(7.3%)、「III a」が78名(1.2%)、「III b」が10名(0.2%)、「IV」が4名(0.1%)、「M」が2名(0.0%)であった。

3回目では、「正常」が3,615名(54.8%)、「I」が1,862名(28.2%)、「II a」が461名(7.0%)、「II b」が563名(8.5%)、「III a」が80名(1.2%)、「III b」が10名(0.2%)、「IV」が4名(0.1%)、「M」が2名(0.0%)であった。

4回目では、「正常」が3,473名(52.6%)、「I」が1,843名(27.9%)、「II a」が507名(7.7%)、「II b」が654名(9.9%)、「III a」が108名(1.6%)、「III b」が10名(0.2%)、「IV」が1名(0.0%)、「M」が1名(0.0%)であった。

『認知症高齢者の日常生活自立度』別に割合の変化をみてみると、「正常」「I」「II a」「II b」の割合は初回から4回目にかけて増加していたが、「III a」「III b」「IV」「M」の割合は初回から4回目にかけてその割合はあまり変化しないことがわかった。

表 178 『認知症高齢者の日常生活自立度』（予防有用型：N=6,597）

	初回			2回目			3回目			4回目		
	N	%	累積%	N	%	累積%	N	%	累積%	N	%	累積%
正常	4005	60.7	60.7	3816	57.8	57.8	3615	54.8	54.8	3473	52.6	52.6
I	1619	24.5	85.3	1766	26.8	84.6	1862	28.2	83.0	1843	27.9	80.6
II a	394	6.0	91.2	441	6.7	91.3	461	7.0	90.0	507	7.7	88.3
II b	453	6.9	98.1	480	7.3	98.6	563	8.5	98.5	654	9.9	98.2
III a	91	1.4	99.5	78	1.2	99.8	80	1.2	99.8	108	1.6	99.8
III b	20	0.3	99.8	10	0.2	99.9	10	0.2	99.9	10	0.2	100
IV	12	0.2	100	4	0.1	100	4	0.1	100	1	0.0	100
M	3	0.0	100	2	0.0	100	2	0.0	100	1	0.0	100
合計	6597	100		6597	100		6597	100		6597	100	

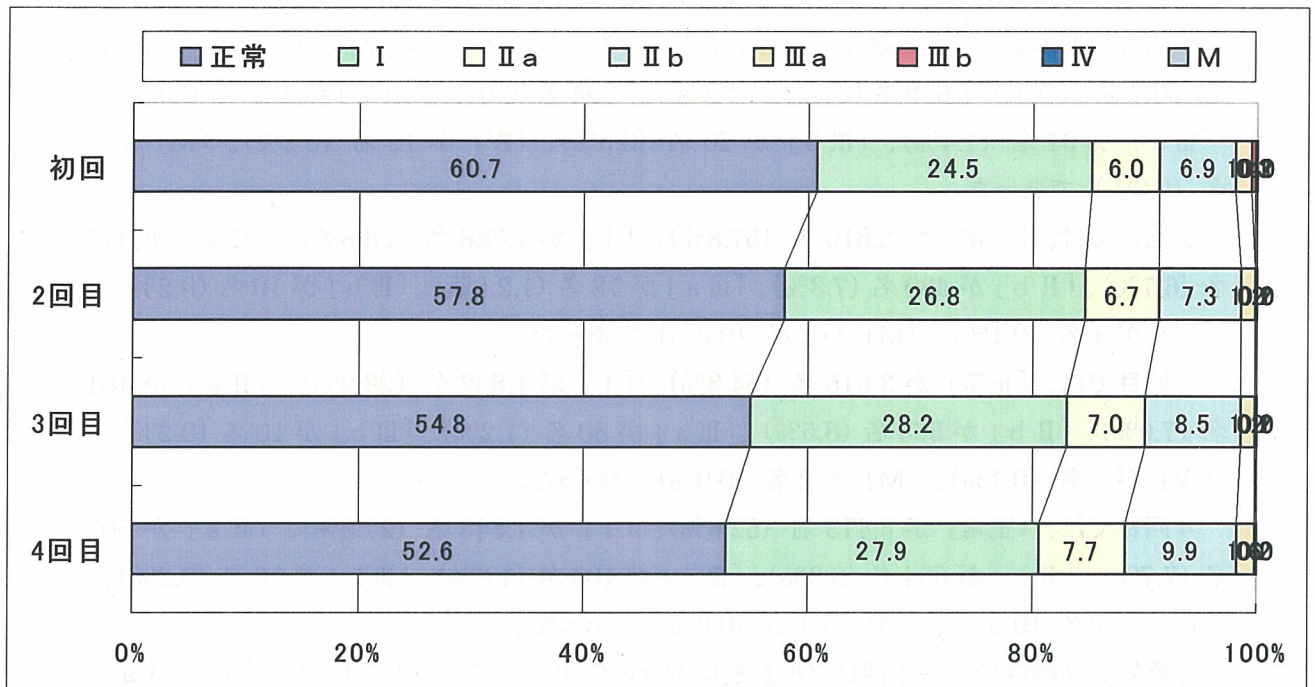


図 198 『認知症高齢者の日常生活自立度』の変化（予防有用型：N=6,597）

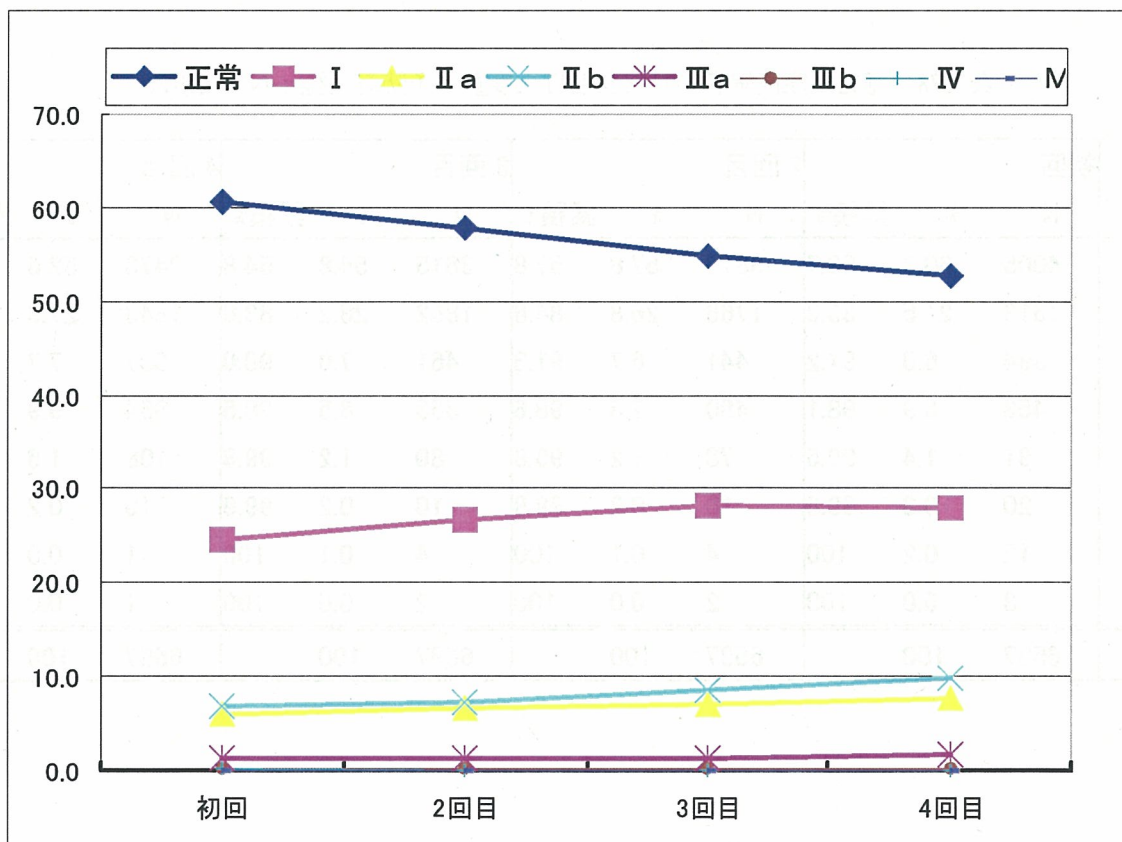


図 199 『認知症高齢者の日常生活自立度』別の变化（予防有用型：N=6,597）

## 5. 認定時点の予防有用型における認知症の有症割合の要介護度別の変動

### (1) 初回の認知症の有症割合

次に、予防有用型において、要介護度別に認知症割合の経年的な変化についてみた。認知症を『認知症高齢者の日常生活自立度』がⅡ以上とし、その割合の変化についてみると、初回における要介護高齢者の認知症の有症割合は、14.7%であった。

要介護度別にみると、「要介護 5」が認知症の割合が最も多く 26 名 (49.1%)、次に「要介護 4」が 45 名 (30.0%)、「要介護 3」が 95 名 (22.7%)、「要介護 2」が 182 名 (17.9%)、「要介護 1」が 376 名 (13.5%)、「要支援」が 249 名 (11.5%)、「非該当」が 0 名 (0%)と続いた。要介護 5 では、ほぼ半数が認知症であった。

表 179 初回の要介護度別認知症割合 (予防有用型 : N=6,597)

	認知症なし		認知症		計	
	N	%	N	%	N	%
非該当	11	100	0	0	11	100
要支援	1916	88.5	249	11.5	2165	100
要介護1	2408	86.5	376	13.5	2784	100
要介護2	834	82.1	182	17.9	1016	100
要介護3	323	77.3	95	22.7	418	100
要介護4	105	70.0	45	30.0	150	100
要介護5	27	50.9	26	49.1	53	100
合計	5624	85.3	973	14.7	6597	100

### (2) 2回目の認知症の有症割合の変動

2回目の要介護高齢者の認知症の有症割合は、15.4%で初回よりも増加していた。

要介護度別にみると、「要介護 4」が認知症の割合が最も多く 35 名 (23.3%)、次に「要介護 5」が 11 名 (20.8%)、「要介護 3」が 78 名 (18.7%)、「要介護 2」が 182 名 (17.9%)、「要介護 1」が 418 名 (15.0%)、「要支援」が 291 名 (13.4%)、「非該当」が 0 名 (0.0%)と続いた。

このうち、「要支援」、「要介護 1」に関しては、初回からと認知症の割合が増加していた。

しかし、要介護 3 は、22.7%から 18.7%、要介護 4 は、30.0%から 23.3%、要介護 5 は 49.1%から 20.8%と要介護 3 以上になると、認知症の有症割合は、低くなっていた。

表 180 2回目の要介護度別認知症割合（予防有用型：N=6,597）

	認知症なし		認知症		計	
	N	%	N	%	N	%
非該当	11	100	0	0.0	11	100
要支援	1874	86.6	291	13.4	2165	100
要介護1	2366	85.0	418	15.0	2784	100
要介護2	834	82.1	182	17.9	1016	100
要介護3	340	81.3	78	18.7	418	100
要介護4	115	76.7	35	23.3	150	100
要介護5	42	79.2	11	20.8	53	100
合計	5582	84.6	1015	15.4	6597	100

(3) 3回目の認知症の有症割合の変動

3回目の要介護高齢者の認知症の有症割合は、17.0%で初回よりも、2回目よりも増加していた。要介護度別にみると、「要介護5」が認知症の割合が最も多く15名（28.3%）、次に「要介護4」が33名（22.0%）、「要介護2」が196名（19.3%）、「要介護3」が75名（17.9%）、「要介護1」が458名（16.5%）、「要支援」が342名（15.8%）、「非該当」が1名（9.1%）と続いた。

このうち、有症割合が最も低かったのは、「非該当」で9.1%であった。要支援も2回目の13.41%から15.8%に増加し、要介護1も15.0%から16.5%と増加し、これも初回よりも2回目よりも高い割合であった。要介護2も17.9%から19.3%と増加していた。要介護3は、2回目の18.7%から17.9%、要介護4は、23.3%から22.0%と減少していたが、要介護5だけは、20.8%から28.3%と増加していた。

表 181 3回目の要介護度別認知症割合（予防有用型：N=6,597）

	認知症なし		認知症		計	
	N	%	N	%	N	%
非該当	10	90.9	1	9.1	11	100
要支援	1823	84.2	342	15.8	2165	100
要介護1	2326	83.5	458	16.5	2784	100
要介護2	820	80.7	196	19.3	1016	100
要介護3	343	82.1	75	17.9	418	100
要介護4	117	78.0	33	22.0	150	100
要介護5	38	71.7	15	28.3	53	100
合計	5477	83.0	1120	17.0	6597	100

(4) 4回目の認知症割合の変動

4回目の要介護高齢者の認知症の有症割合は、19.4%で初回よりも、2回目、3回目よりも増加していた。

要介護度別にみると、「要介護4」が認知症の割合が最も多く39名(26.0%)、次に「要介護5」が13名(24.5%)、「要介護2」が207名(20.4%)、「要介護1」が544名(19.5%)、「要支援」が400名(18.5%)、「要介護3」が77名(18.4%)、「非該当」が1名(9.1%)と続いた。

これらの結果から、「非該当」「要支援」「要介護1」「要介護2」については、初回から4回目まで認知症の割合が増加しているが、「要介護3」「要介護4」「要介護5」に関してはその傾向がみられなかった。

表 182 4回目の要介護度別認知症割合(予防有用型: N=6,597)

	認知症なし		認知症		計	
	N	%	N	%	N	%
非該当	10	90.9	1	9.1	11	100
要支援	1765	81.5	400	18.5	2165	100
要介護1	2240	80.5	544	19.5	2784	100
要介護2	809	79.6	207	20.4	1016	100
要介護3	341	81.6	77	18.4	418	100
要介護4	111	74.0	39	26.0	150	100
要介護5	40	75.5	13	24.5	53	100
合計	5316	80.6	1281	19.4	6597	100



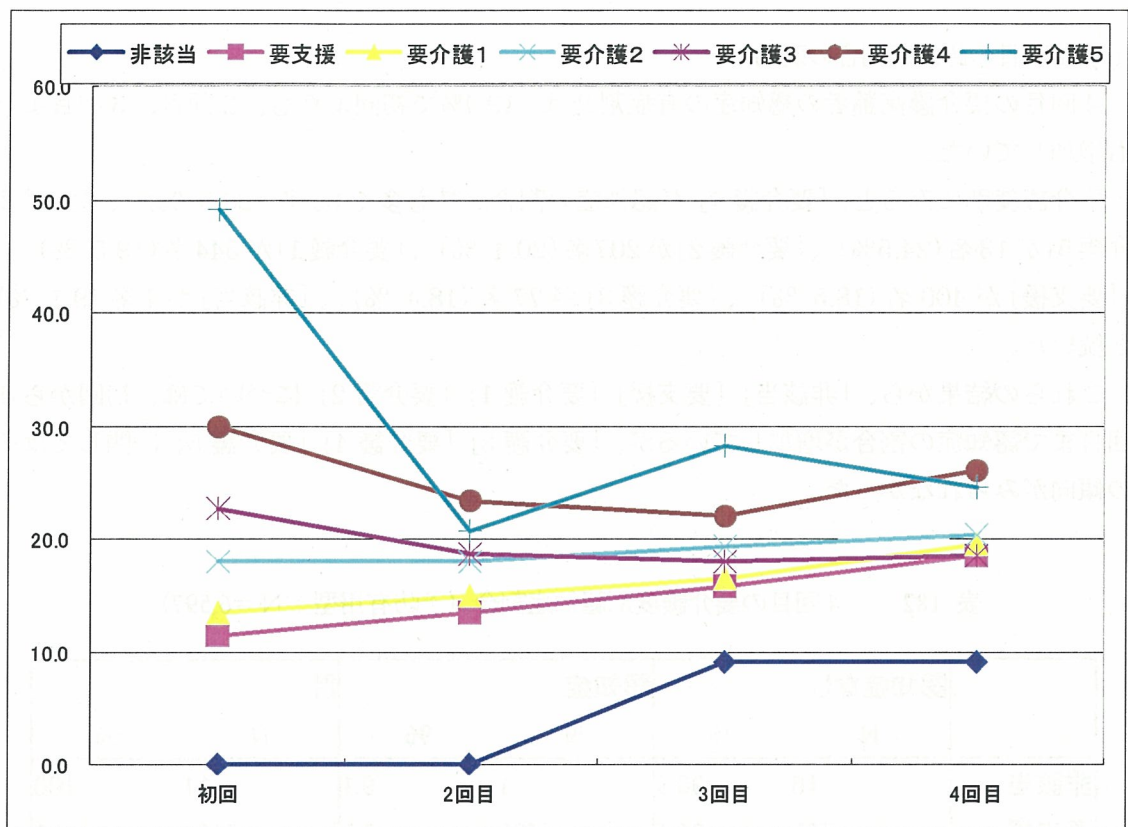


図 200 要介護度別認知症割合の経年意的変化（予防有用型：N=6,597）

## 第9章 予防有用型の状態像の特徴と経年的な変化

本章では、本研究において新たに開発した高齢者介護類型モデルを用いて、選定された介護予防有用型の経年的変化の特徴を全体の経年的変化と比較することによって明らかにすることを目的としている。

### 1. 状態像の経年的な変化

#### (1) 麻痺 (左上)

予防有用型では、麻痺 (左上) について、初回は、「なし」が5,925名 (89.8%) で、「あり」が672名 (10.2%) であった。2回目は、「なし」が5,945名 (90.1%) で、「あり」が652名 (9.9%) であった。3回目は、「なし」が5,934名 (89.9%) で、「あり」が663名 (10.1%) であった。4回目は、「なし」が5,954名 (90.3%) で、「あり」が643名 (9.7%) であった。

全体の傾向と比較して、予防有用型群については「あり」の割合の変化が小さかった。

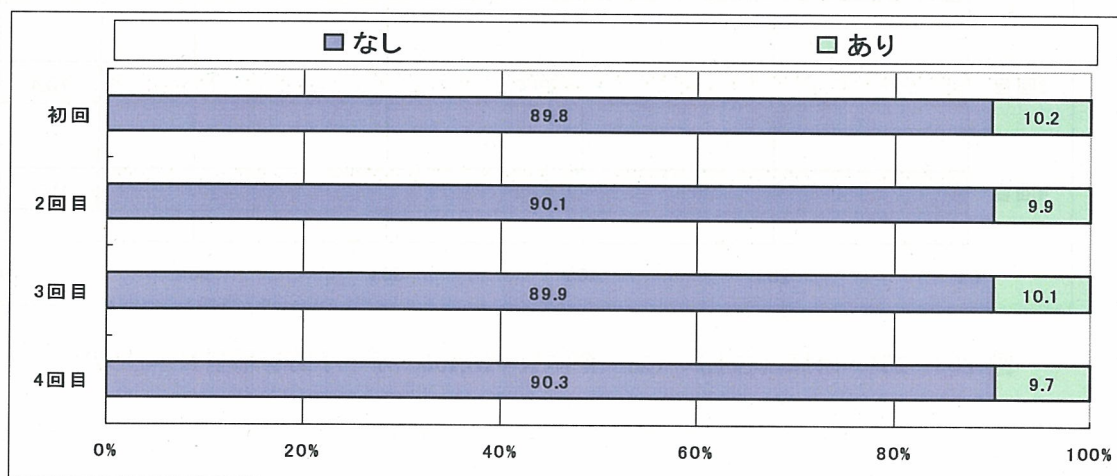
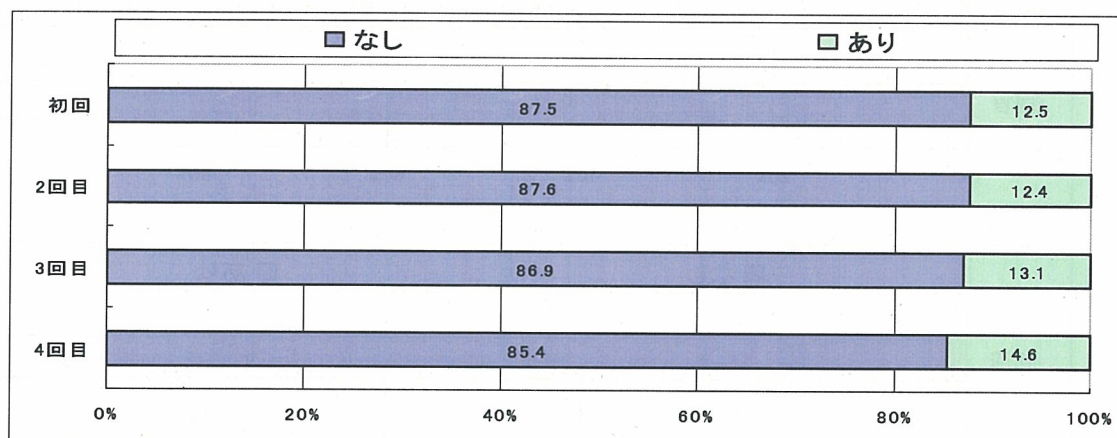


図 201・202 麻痺 (左上) (上: 全体 N=16,156, 下: 予防有用型 N=6,597)



(2) 麻痺 (右上)

予防有用型では、麻痺 (右上) について、初回は、「なし」が 5,892 名 (89.3 %) で、「あり」が 705 名 (10.7 %) であった。2 回目は、「なし」が 5,898 名 (89.4 %) で、「あり」が 699 名 (10.6 %) であった。3 回目は、「なし」が 5,913 名 (89.6 %) で、「あり」が 684 名 (10.4 %) であった。4 回目は、「なし」が 5,922 名 (89.8 %) で、「あり」が 675 名 (10.2 %) であった。

全体の傾向と比較して、予防有用型群は、「麻痺あり」の割合にあまり変化がなかった。

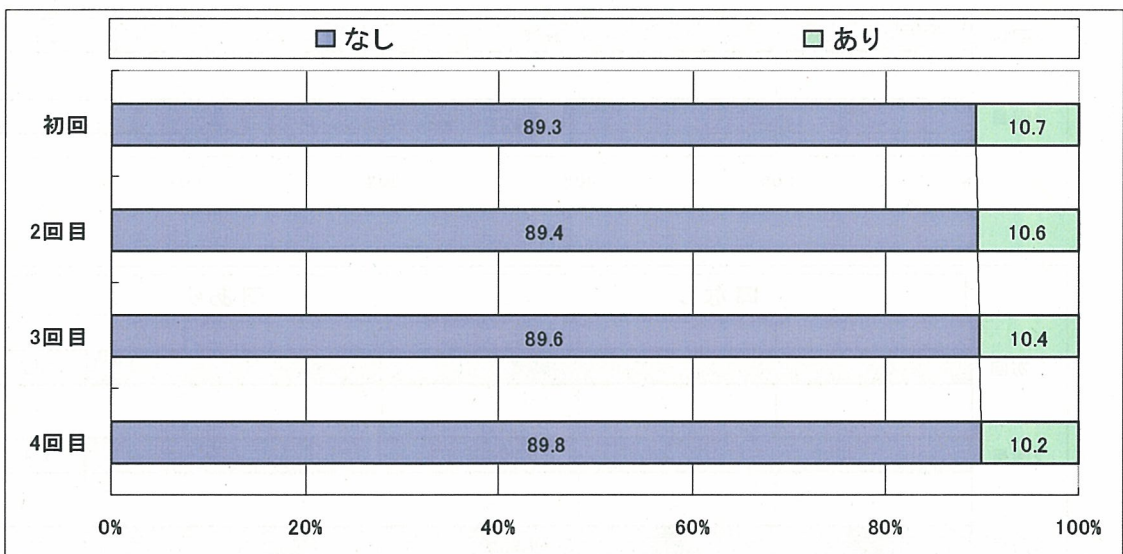
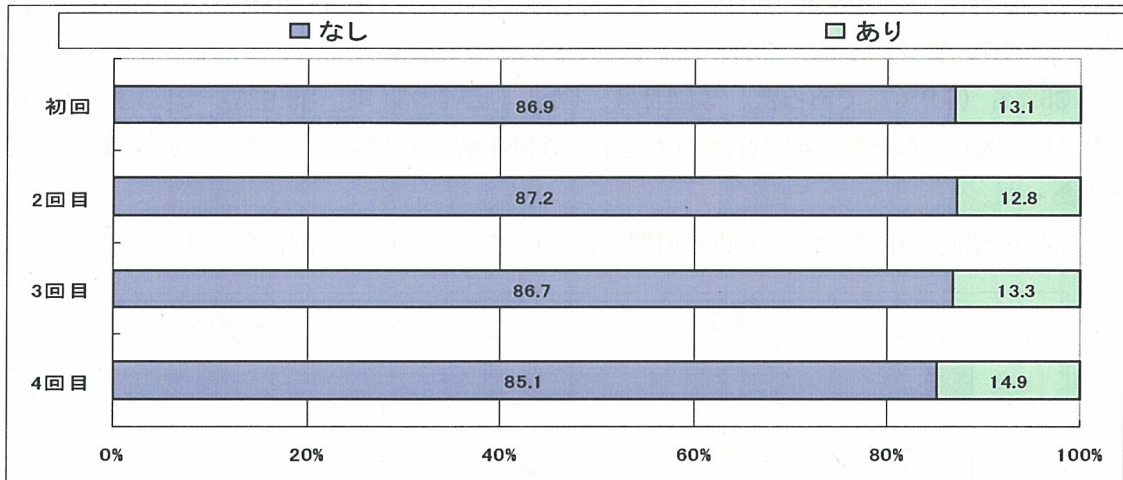


図 203・204 麻痺 (右上) (上: 全体 N=16,156, 下: 予防有用型 N=6,597)

(3) 麻痺 (左下)

予防有用型では、麻痺 (左下) について、初回は、「なし」が 3,438 名 (52.1 %) で、「あり」が 3,159 名 (47.9 %) であった。2 回目は、「なし」が 3,143 名 (47.6 %) で、「あり」が 3,454 名 (52.4 %) であった。3 回目は、「なし」が 2,832 名 (42.9 %) で、「あり」が 3,765 名 (57.1 %) であった。4 回目は、「なし」が 2,514 名 (38.1 %) で、「あり」が 4,083 名 (61.9 %) であった。

全体の傾向と同様に予防有用型群においても、初回から 4 回目にかけて、「あり」の割合は増加していた。

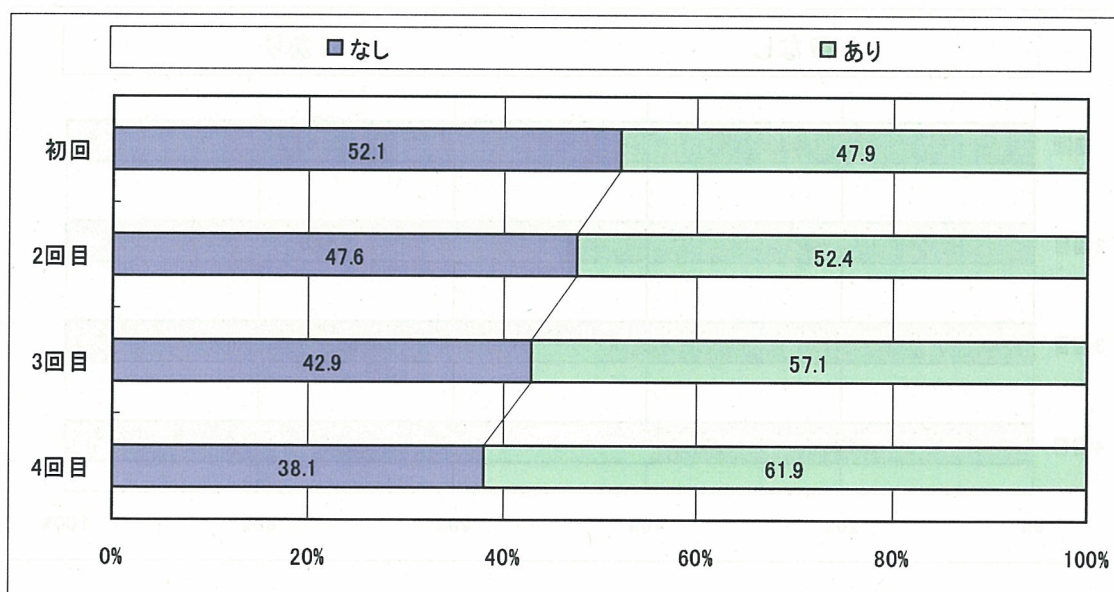
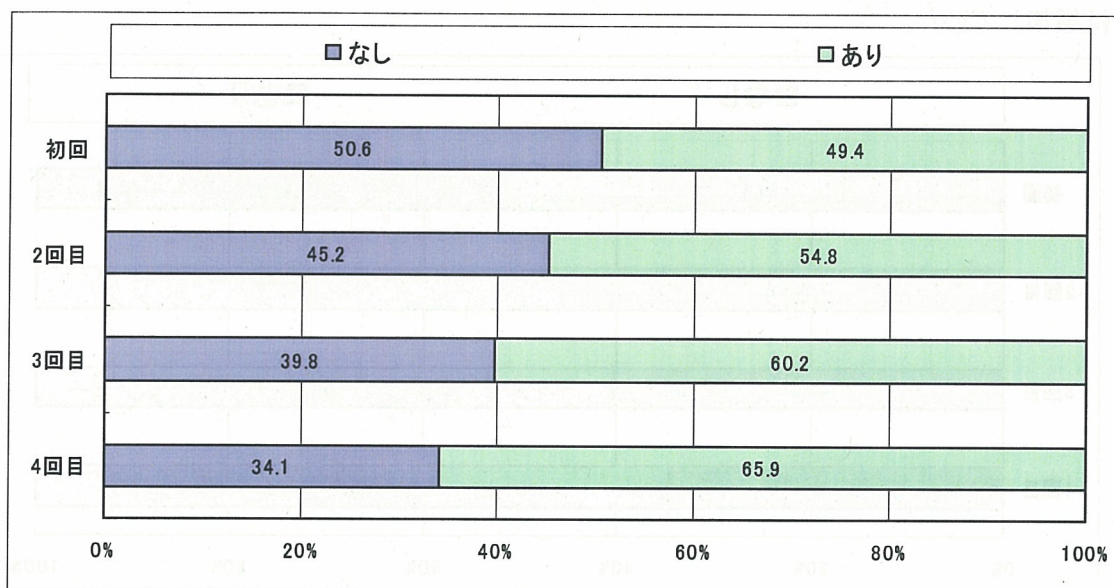


図 205・206 麻痺 (左下) (上: 全体 N=16,156, 下: 予防有用型 N=6,597)

(4) 麻痺（右下）

予防有用型では、麻痺（右下）について、初回は、「なし」が3,481名（52.8%）で、「あり」が3,116名（47.2%）であった。2回目は、「なし」が3,172名（48.1%）で、「あり」が3,425名（51.9%）であった。3回目は、「なし」が2,879名（43.6%）で、「あり」が3,718名（56.4%）であった。4回目は、「なし」が2,559名（38.8%）で、「あり」が4,038名（61.2%）であった。

全体の傾向と同様に予防有用型群においても、初回から4回目にかけて「あり」の割合は増加していた。

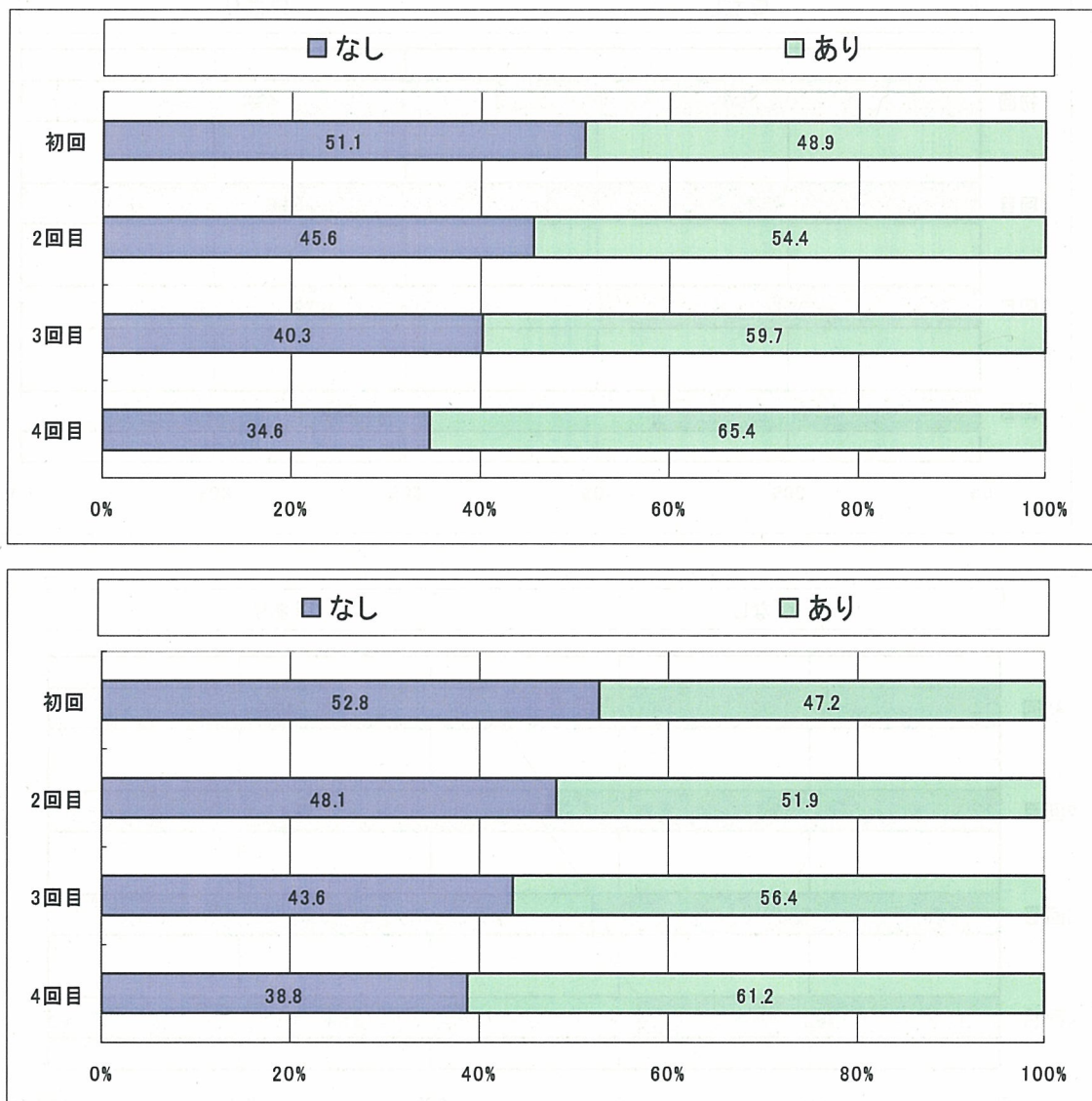


図 207・208 麻痺（右下）（上：全体 N=16,156，下：予防有用型 N=6,597）



(5) 麻痺（その他）

予防有用型では、麻痺（その他）について、初回は、「なし」が5,875名（89.1％）で、「あり」が722名（10.9％）であった。2回目は、「なし」が5,839名（88.5％）で、「あり」が758名（11.5％）であった。3回目は、「なし」が5,777名（87.6％）で、「あり」が820名（12.4％）であった。4回目は、「なし」が5,720名（86.7％）で、「あり」が877名（13.3％）であった。

全体の傾向と同様に予防有用型群についても初回から4回目にかけて「あり」の割合が増加していた。

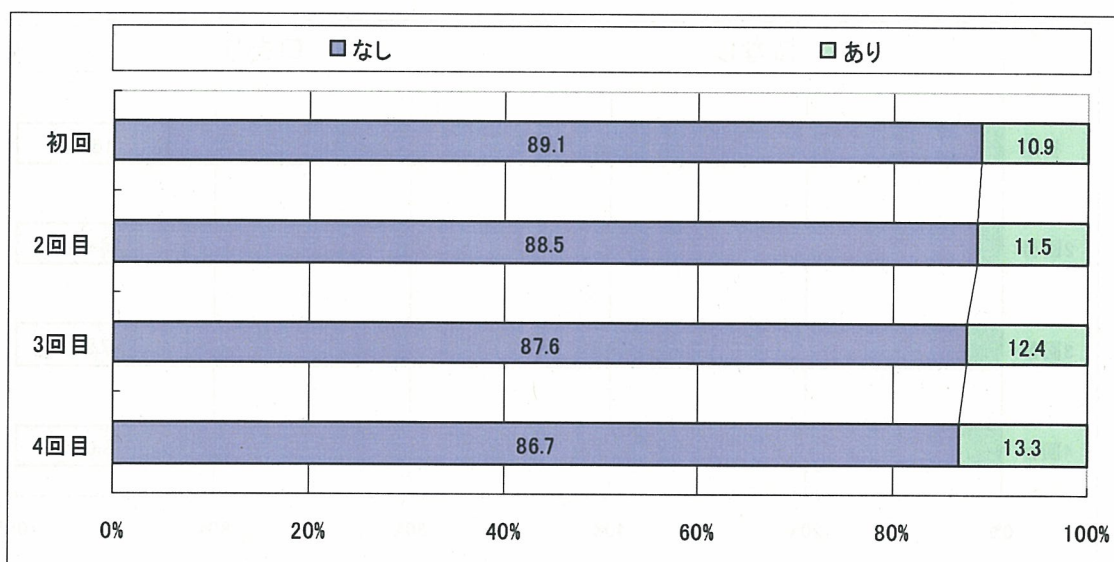
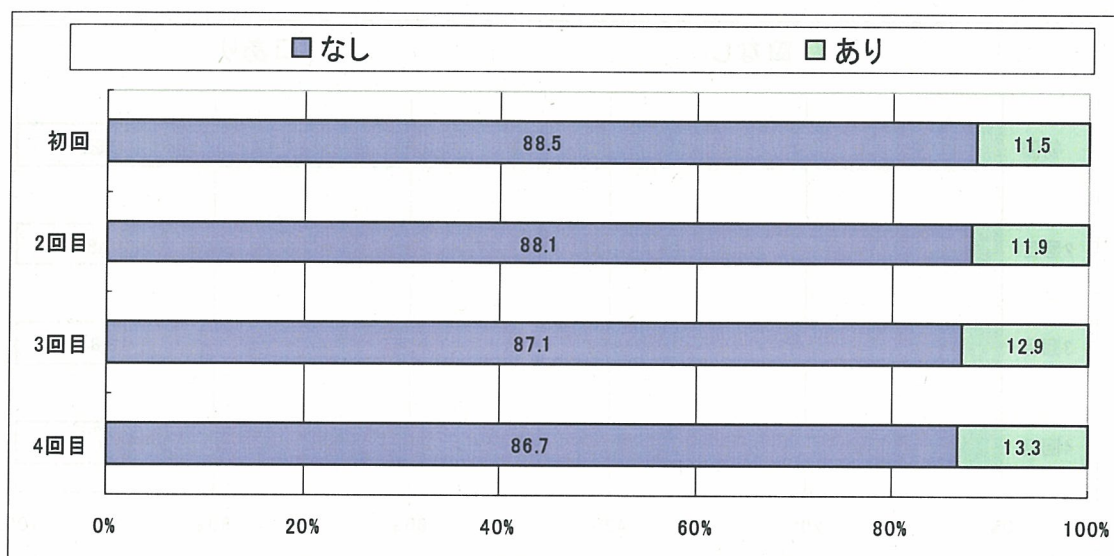


図 209・210 麻痺（その他）（上：全体N=16,156，下：予防有用型N=6,597）

(6) 拘縮（肩関節）

予防有用型では、拘縮（肩関節）について、初回は、「なし」が5,586名（84.7％）で、「あり」が1,011名（15.3％）であった。2回目は、「なし」が5,483名（83.1％）で、「あり」が1,114名（16.9％）であった。3回目は、「なし」が5,460名（82.8％）で、「あり」が1,137名（17.2％）であった。4回目は、「なし」が5,409名（82.0％）で、「あり」が1,188名（18.0％）であった。

全体の傾向と同様に、予防有用型群についても初回から4回目にかけて「拘縮（肩関節）あり」の割合が増加していた。

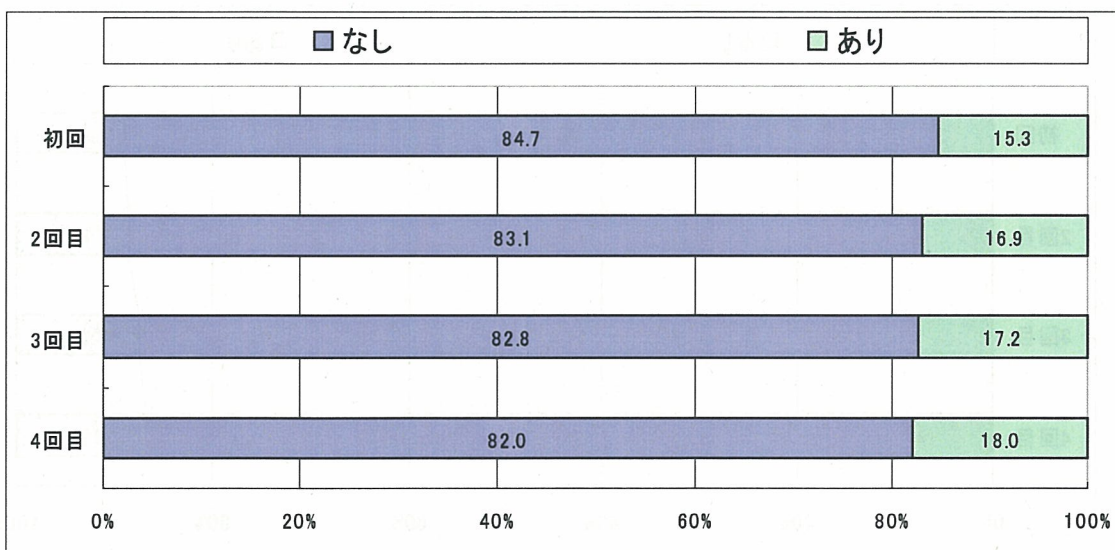
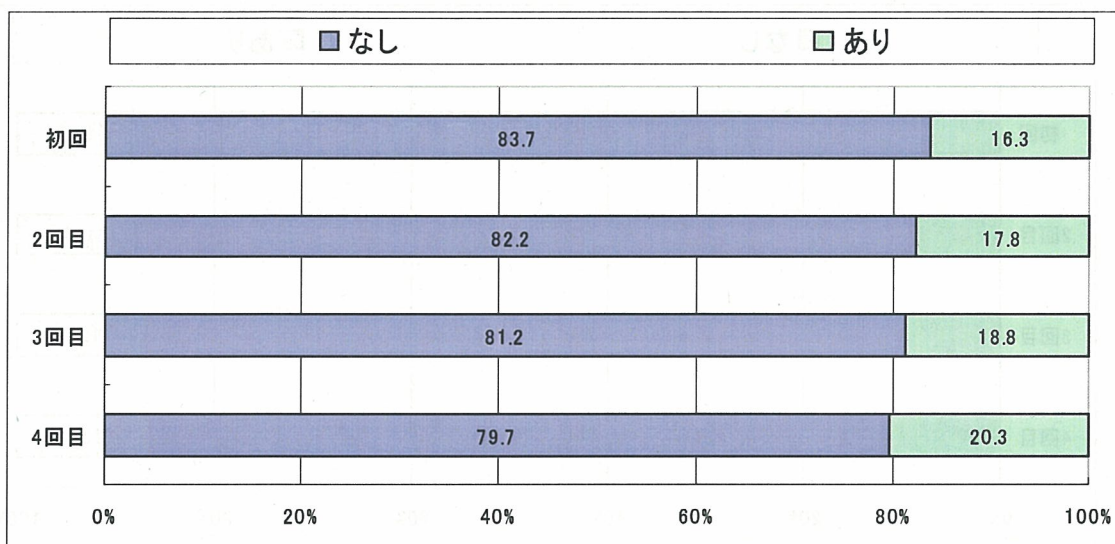


図 211・212 拘縮（肩関節）（上：全体 N=16,156，下：予防有用型 N=6,597）



(7) 拘縮 (肘関節)

予防有用型では、拘縮 (肘関節) について、初回は、「なし」が 6,254 名 (94.8 %) で、「あり」が 343 名 (5.2 %) であった。2 回目は、「なし」が 6,259 名 (94.9 %) で、「あり」が 338 名 (5.1 %) であった。3 回目は、「なし」が 6,257 名 (94.8 %) で、「あり」が 340 名 (5.2 %) であった。4 回目は、「なし」が 6,262 名 (94.9 %) で、「あり」が 335 名 (5.1 %) であった。

全体の傾向と比較すると、予防有用型群においては、「拘縮 (肘関節) あり」の割合には、ほとんど変化がなかった。

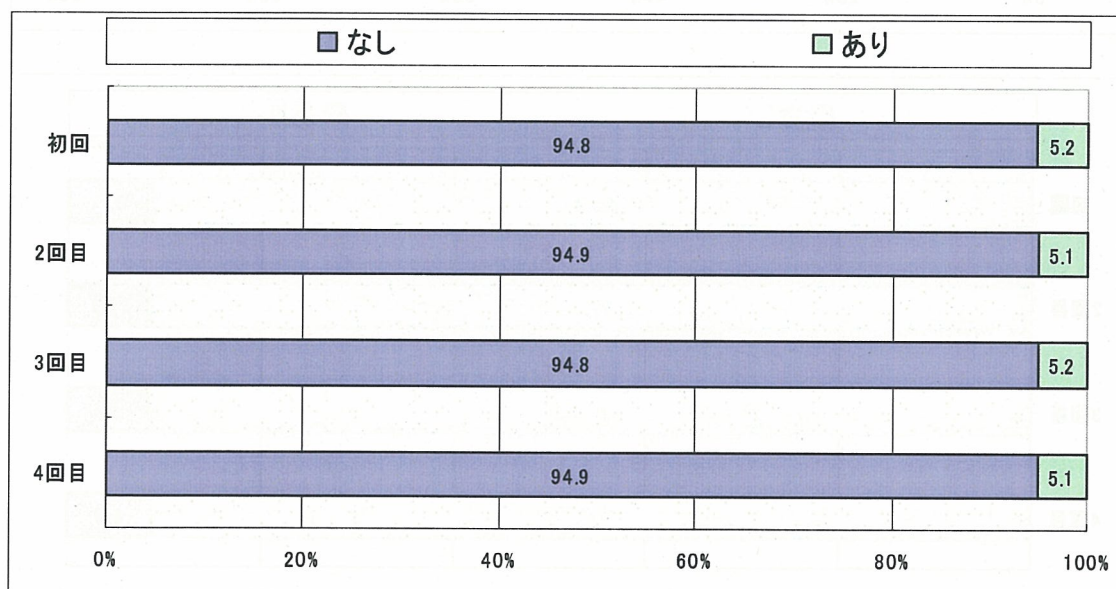
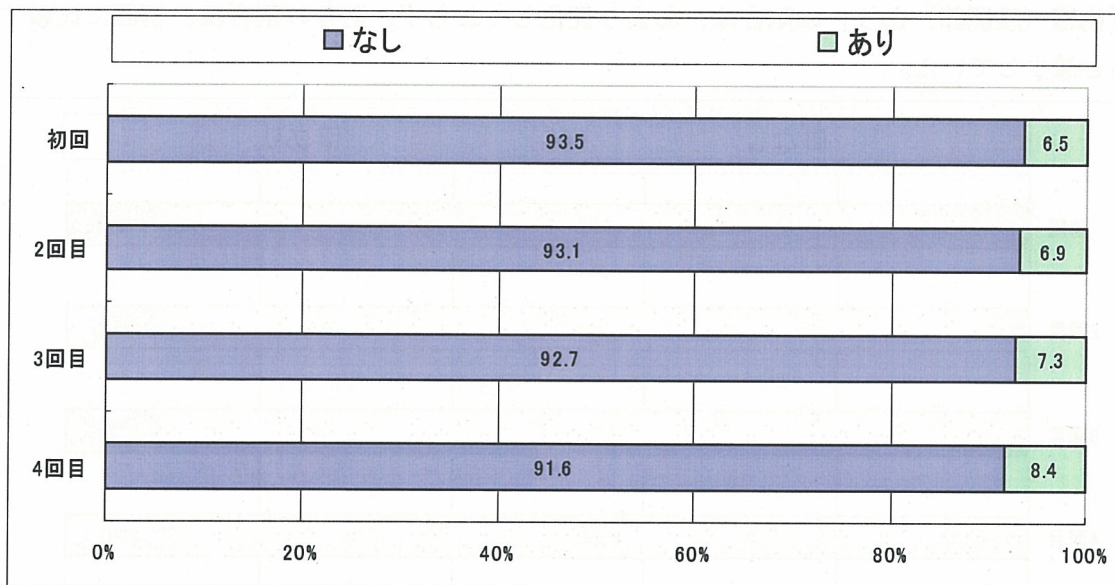


図 213・214 拘縮 (肘関節) (上: 全体 N=16,156, 下: 予防有用型 N=6,597)

(8) 拘縮（股関節）

予防有用型では、拘縮（股関節）は、初回は、「なし」が5,996名（90.9％）で、「あり」が601名（9.1％）であった。2回目は、「なし」が6,027名（91.4％）で、「あり」が570名（8.6％）であった。3回目は、「なし」が6,022名（91.3％）で、「あり」が575名（8.7％）であった。4回目は、「なし」が6,022名（91.3％）で、「あり」が575名（8.7％）であった。

全体の傾向は、初回から4回目にかけて、「あり」が増加していたが、予防有用型群は、「拘縮（股関節）あり」の割合は、あまり変化しておらず、ありの割合は、初回に比較すると減少していた。

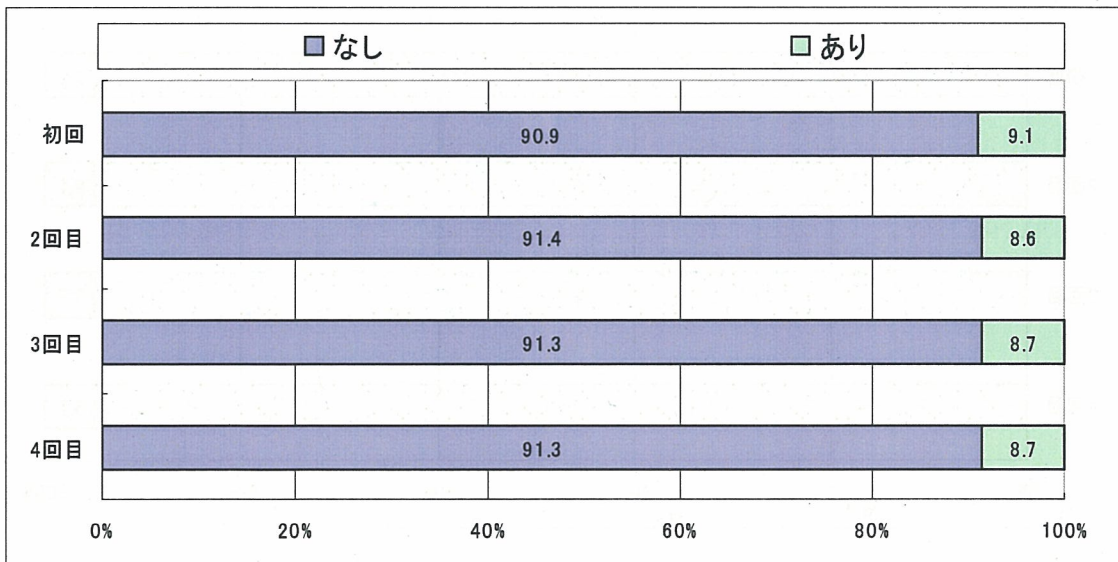
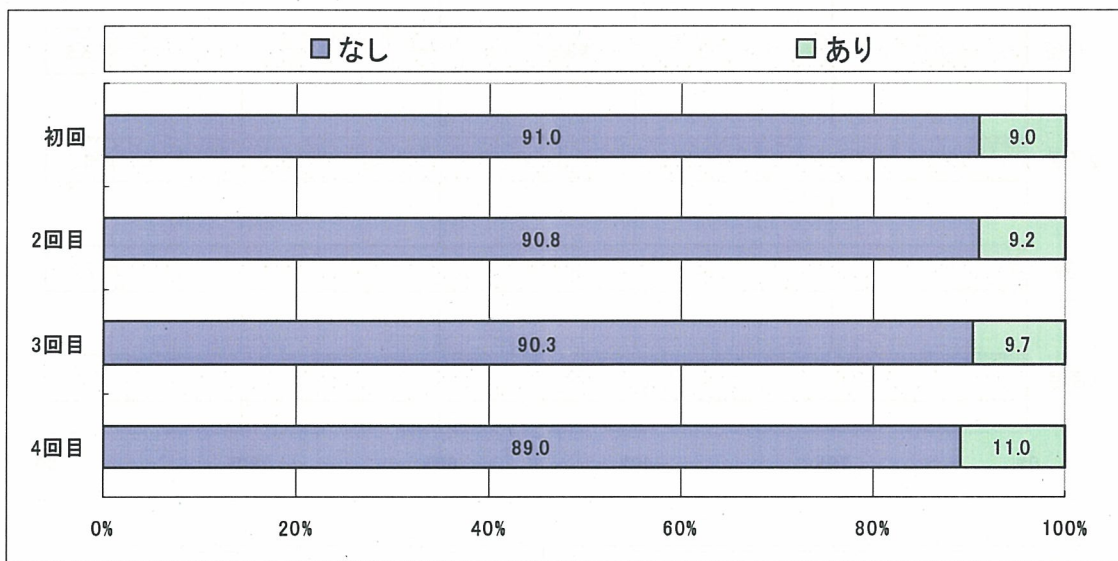


図 215・216 拘縮（股関節）（上：全体 N=16,156，下：予防有用型 N=6,597）

(9) 拘縮（膝関節）

予防有用型では、拘縮（膝関節）について、初回は、「なし」が4,205名（63.7%）で、「あり」が2,392名（36.3%）であった。2回目は、「なし」が4,065名（61.6%）で、「あり」が2,532名（38.4%）であった。3回目は、「なし」が4,082名（61.9%）で、「あり」が2,515名（38.1%）であった。4回目は、「なし」が4,054名（61.5%）で、「あり」が2,543名（38.5%）であった。

全体の漸次、増加する傾向に比較すると予防有用型群の「拘縮（膝関節）あり」の割合は、初回から2回目にかけては、全体と同様に増加するが、3回目は減少し、その後、再び増加するという変化を示していた。

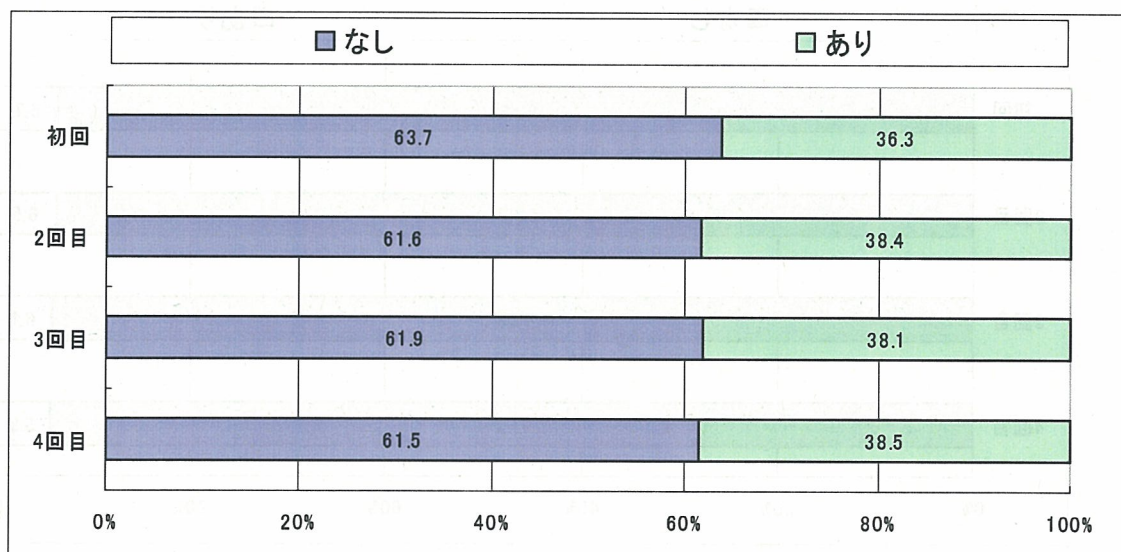
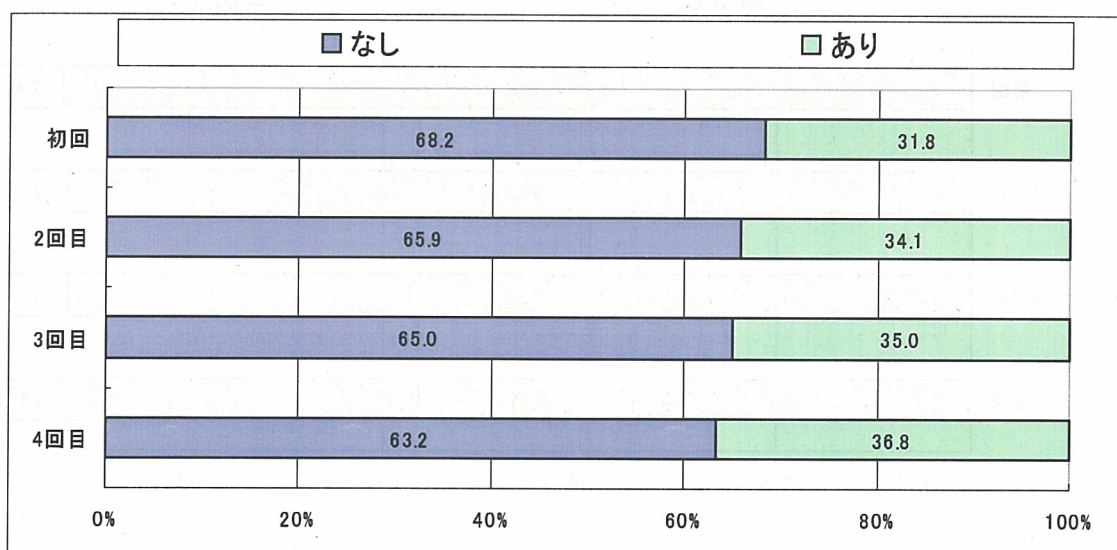


図 217・218 拘縮（膝関節）（上：全体 N=16,156，下：予防有用型 N=6,597）



(10) 拘縮（足関節）

予防有用型では、拘縮（足関節）について、初回は、「なし」が6,155名（93.3％）で、「あり」が442名（6.7％）であった。2回目は、「なし」が6,166名（93.5％）で、「あり」が431名（6.5％）であった。3回目は、「なし」が6,193名（93.9％）で、「あり」が404名（6.1％）であった。4回目は、「なし」が6,210名（94.1％）で、「あり」が387名（5.9％）であった。

全体的には、「拘縮（足関節）あり」の割合は初回から4回目にかけて増加するが、予防有用型群については初回から4回目にかけて減少していた。

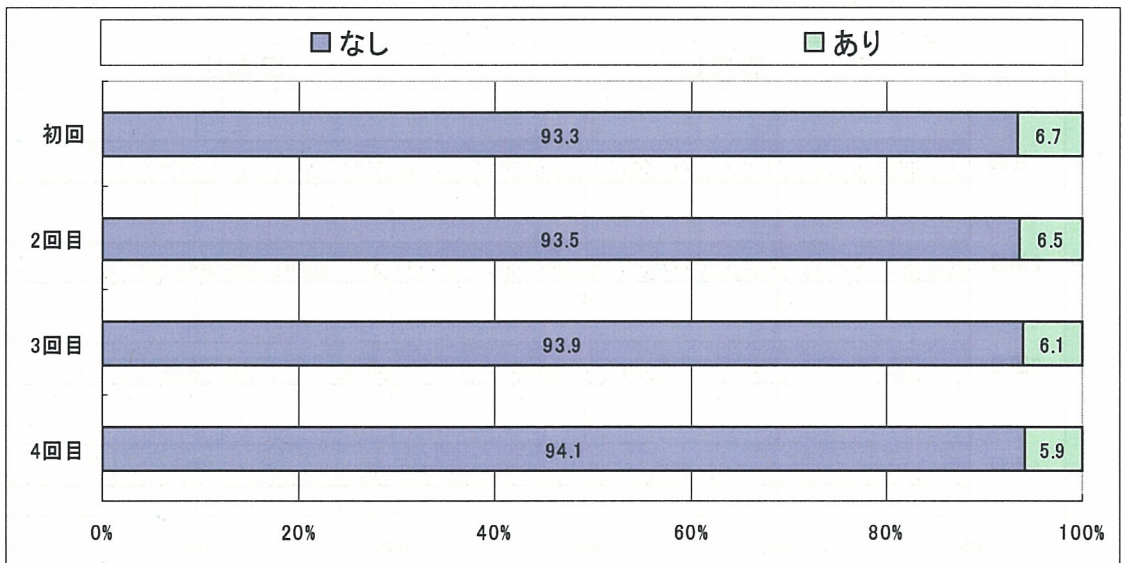
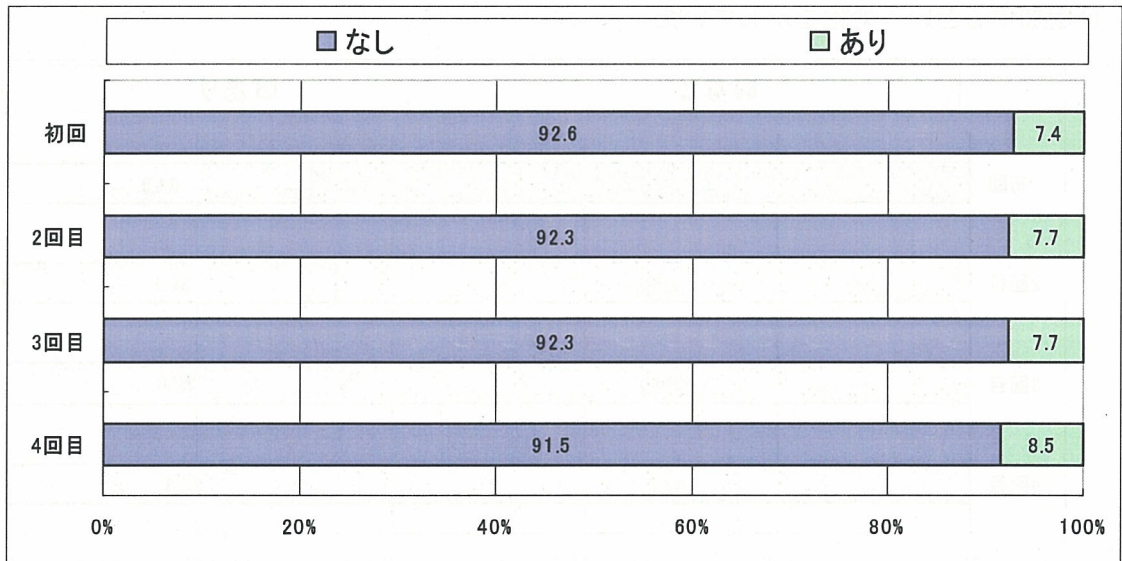


図 219・220 拘縮（足関節）（上：全体 N=16,156，下：予防有用型 N=6,597）

(11) 拘縮（その他）

予防有用型では、拘縮（その他）について、初回は、「なし」が5,496名（83.3%）で、「あり」が1,101名（16.7%）であった。2回目は、「なし」が5,570名（84.4%）で、「あり」が1,027名（15.6%）であった。3回目は、「なし」が5,618名（85.2%）で、「あり」が979名（14.8%）であった。4回目は、「なし」が5,629名（85.3%）で、「あり」が968名（14.7%）であった。

全体としては、「拘縮（その他）あり」の割合は、初回から4回目にかけてあまり変化がないが、予防有用型群については、初回から4回目にかけて減少していた。

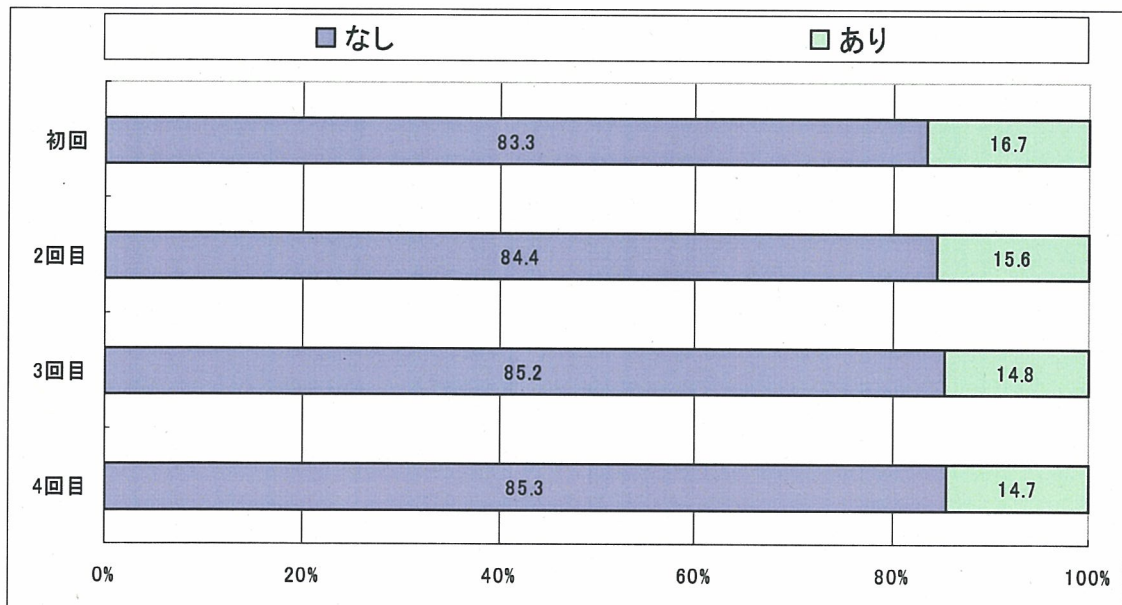
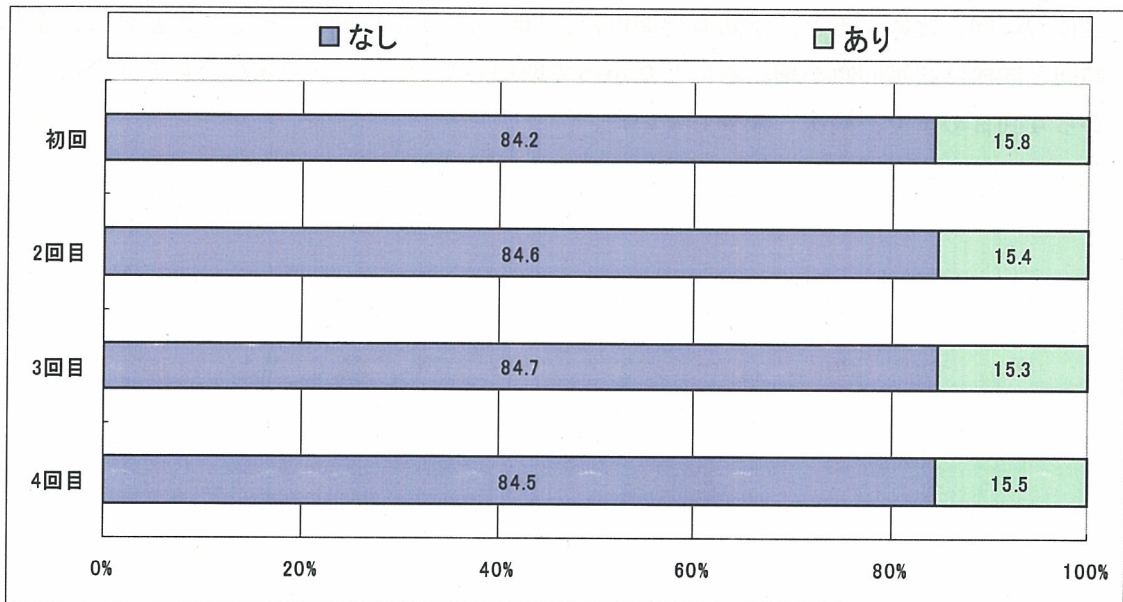


図 221・222 拘縮（その他）（上：全体N=16,156，下：予防有用型N=6,597）



## (12) 寝返り

予防有用型では、寝返りは、初回は、「つかまらないでできる」が 4,222 名 (64.0 %) で、「何かにつかまればできる」が 2,137 名 (32.4 %) で、「できない」が 238 名 (3.6 %) であった。2 回目は、「つかまらないでできる」が 4,213 名 (63.9 %) で、「何かにつかまればできる」が 2,237 名 (33.9 %) で、「できない」が 147 名 (2.2 %) であった。3 回目は、「つかまらないでできる」が 4,080 名 (61.8 %) で、「何かにつかまればできる」が 2,423 名 (36.7 %) で、「できない」が 94 名 (1.4 %) であった。4 回目は、「つかまらないでできる」が 3,894 名 (59.0 %) で、「何かにつかまればできる」が 2,630 名 (39.9 %) で、「できない」が 73 名 (1.1 %) であった。

全体の傾向と比較すると、予防有用型群は、「何かにつかまればできる」の割合は、全体の傾向と同様に認定回数が増えるにしたがって増加していたが、「できない」の割合は、初回から 4 回目めまで、漸次、減少していた。

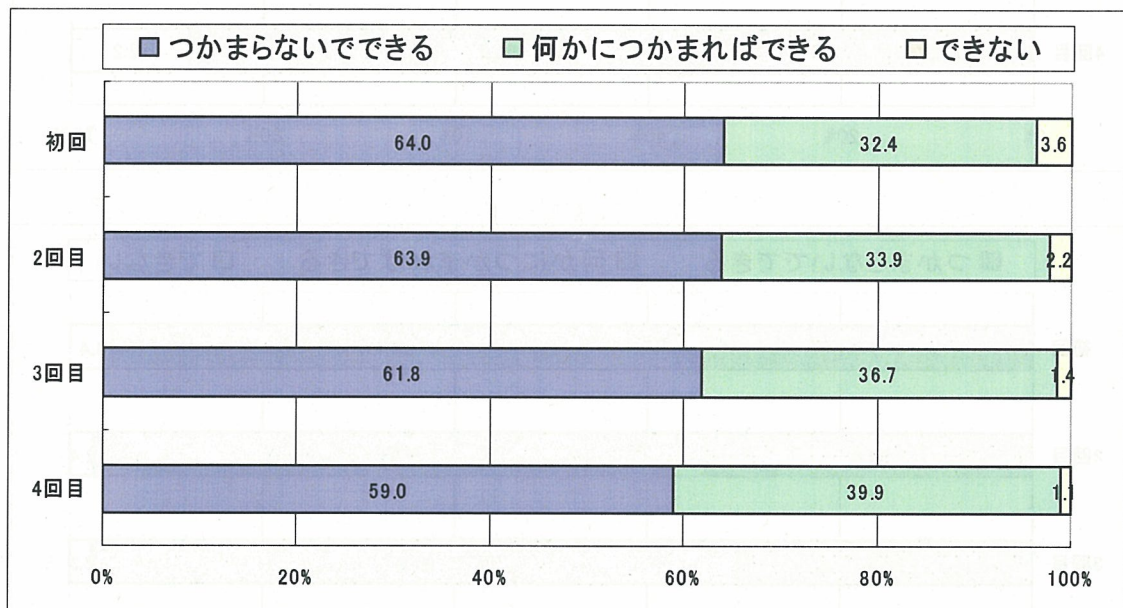
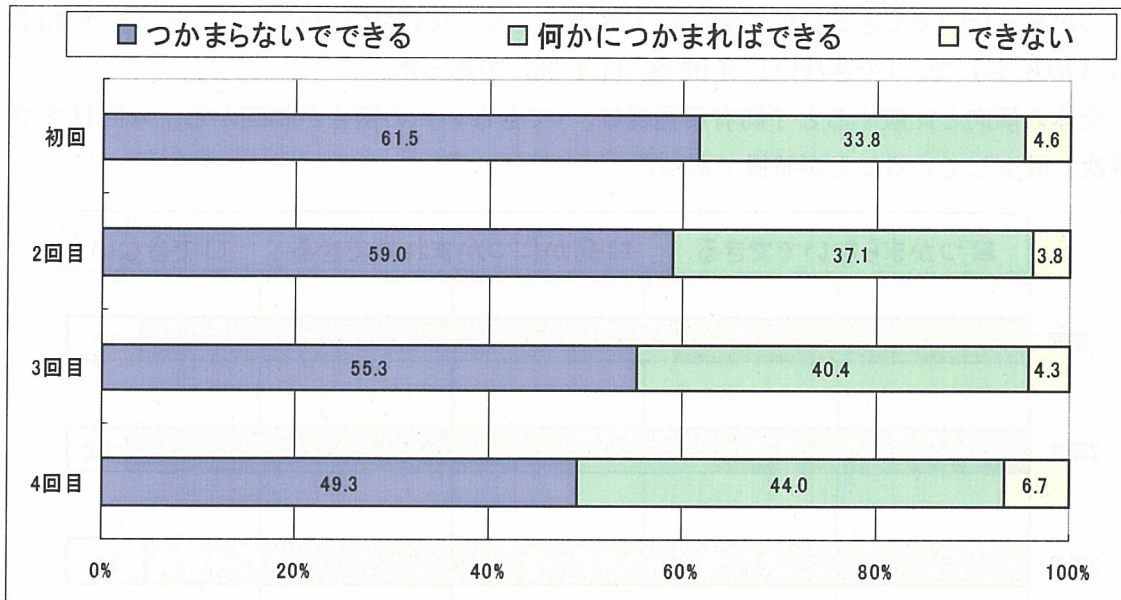


図 223・224 寝返り（上：全体N=16,156，下：予防有用型N=6,597）

(13) 起き上がり

予防有用型では、起き上がりについては、初回は、「つかまらないでできる」が2,454名（37.2%）で、「何かにつかまればできる」が3,850名（58.4%）で、「できない」が293名（4.4%）であった。2回目は、「つかまらないでできる」が2,243名（34.0%）で、「何かにつかまればできる」が4,194名（63.6%）で、「できない」が160名（2.4%）であった。3回目は、「つかまらないでできる」が2,013名（30.5%）で、「何かにつかまれば